



Title	「小説家」
Author(s)	濱田, 康行
Citation	農林経済, 9848, 1-1
Issue Date	2007-03-05
Doc URL	<a href="http://hdl.handle.net/2115/19109">http://hdl.handle.net/2115/19109</a>
Rights	本稿は農林経済（時事通信社）に掲載され、同誌の許可を得て転載するものである。「農林経済 2007年3月5日 9848号」に該当する。
Type	column (author version)
Note	巻頭言
File Information	norin9498.pdf



[Instructions for use](#)

## 小説家

小説家のことを作家といたりする。きっと小説を書くことが創作活動だからだろう。仕事というものはおしなべて創造的であるはずだが、研究者と小説家は同じ物書きでもずいぶん違う。

私達、研究者は資料を読み、データを集め、事実関係を整理し、そこに論理性を見つけて記述する。研究者が論文に書いたことがすべて本当かと問われると少々躊躇するが、間違いはあるかもしれないという留保つきで、答えはイエスだ。少なくとも、意図的に事実と違うことは書かない。逆にいえば、調べた事実縛られて書いている。この点、小説家は自由だ。しかも、筆をとれば彼らには想像力という創造のツールがある。

カズオ・イシグロの『私を離さないで』(Never let me go)の内容はここで語らない方がよい。とにかく、小説家の想像力をいかんなくみせつけている。原文は美しく、やや難解だが、訳者の土屋政雄はこれを見事な日本語にしている。まさに才能と才能が出会い結実した日本語版である。

“本場”のアメリカでは臓器移植を待つ人が10万人おり、そのうち7%が移植を受けられないまま亡くなっている。脳死判定の後に臓器を提供する人が年間7千人というがそれでも絶対的に不足。生体間移植でも、提供側も含めて問題が残るといふ。

経済学的に極めてドライにこの問題の解決方法を考えてみよう。高齢化が進むのだから需要が減る見込みはない。移植によって救われる見込みがあるなら、私も含めて人はなんでもする。大金を使ってアメリカで手術を受ける人は多い。第二の移植大国は中国だが2007年から外国人への移植は難しくなる。中国人を優先するという極めて当然の措置が実施される。だから、供給増しか経済学的“解”はない。ある国では金銭取引が公然と行われ、時には“輸入”もある。日本の法律はこれを禁止したが、最近、提供を受けた側が逮捕されるという事件が世間の耳目を引いた。脳死はそんなに多くないし、提供されるケースはごくわずかである(1997年の法制定以来、日本では50件)。実験室で細胞を培養して特定の臓器をつくる試みもあるが、まだ実用化できる段階ではない。つまり供給もままならない。

そこで、悪魔のささやきが聞こえる。“クローン人間をつくれれば様々な臓器がいつぺんにできる”。

1997年の羊のドリー誕生で世界はショックを受けた。それが人間作りに適用可能であったからだ。賢明にも各国はこの技術のヒトへの応用を禁止している。しかし、禁止は“不可能”を意味するのではない。

小説の中に、主人公達が座礁した難破船を見に行くシーンがある。このテーマへの著者の想像力を凝縮した一枚の絵のようだ。需要があつて供給が少ないなら創り出せばよい。そして取引が可能となり価格が安定し双方が満足なら合理的だ。この考え方だけで突き進むと私達はいつか難破する。小説家の想像力によるとそれは遠くない未来なのである。